特集

第４回　子ども・若者フォーラム 2014 困難を絆に子育ての社会化を考える

このフォーラムの両日参加者は延べ1500人と発表されている。早大戸山キャンパスを揺るがした全体会は２階席まで埋まり、第２、第３特設会場を設けることになった。馬場下界隈の寒気を吹き飛ばしてしまうような熱気であった。1.11全体会に沸く会場の雰囲気を精緻に照らし、再現しているのが片岡論文である。本特集は翌日開催の分科会報告を主眼に置いているため、増山氏と藤田氏の挨拶を除き全体会のイントロダクション、パネルディスカッション、リレートーク、対談のすべてを省略せざるを得なかった。当日配布した資料の一部を抜粋しているので、あわせて参照してほしい。片岡論文からは全貌を見られるだけでなく、客観的かつ説得力ある論稿として輝いている。そこには、子ども白書編集委員会とワーカーズコープをコラボレーションしながら、接着役となった氏の卓越した手腕が垣間みえる。

もう一方の平本論文は、1.11当日の基調報告をベースに終了後の小括といった重層形式を採っている。ひと言でいえば、私という一人称を打ち出すことによって、当事者主体の決定的役割を明確に説いている。当事者性こそ自己変革、社会変革の主体であると平本氏が執拗に語っているのは、子ども･若者の居る現場に足しげく赴き、彼らと対峙しその声を聴き自らも発信しながら、わたしもまた変革主体の一員でもあると内省を繰り返し迫った点に特筆すべき向きがある。平本氏の実践力と発信力の強さに驚嘆しないわけにはいかない。

「子ども・若者フォーラム2014」は、「稀なる現象」を生み出していたと想うのは私だけだろうか。文字どおり当事者であるべく子ども・若者が、フォーラムに参加したという現われ形に限定されるのではない。フォーラム全体の中心軸にどっしりと陣取り、お客様ではなくプレゼンテーター､パネリストとして最先端の実践と運動をリードして発表していた､これまでにない「特異性」の表れである。この種の集会は､全国どこを見渡しても大人だけ関係者だけの世界である。しかし、このフォーラムにおいて大人は主役でも脇役でもなく、子ども・若者がまさしくオピニオンリーダーとして、フォーラムを牽引している。おとなレポーターの場合であっても、子ども･若者の当事者主体の可能性について語っている。

戦後日本の子どものありようを一貫して問うてきた「日本子どもを守る会」の「子ども白書編集委員会」と、ワーカーズコープとが協同で開催したというのも象徴的な出来事であった。守る側の大人の主体も守られる側の子どもの当事者主体も同時に追求してきたのが「日本子どもを守る会」の歩みであった。「守る会」は羽仁説子さんが26年間会長をつとめられた後に、太田堯会長へとバトンタッチされている。説子さんのご両親は自由学園の創設者で、戦前戦後に学園で教鞭をとられた宮嶋校長のご子息が参加された。単なる偶然だったのだろうか。そのことはともか

くワーカーズコープからすれば、白書編集委員会はじめ「一般参加」の方々と交わったことは、異なった組織や個人との出会いであった。相互の立場や価値観の違いを越えて、自由闊達な議論へと発展させ、多種多様な「異質」の中から新しい息吹をもらい、自分たちのこれまでの役割や新たな立ち位置を再発見、再認識する場となった。

清掃、ビルメンといわれた「現業」仕事がワーカーズコープの前身の肝だ。それは今も変わらない。21世紀に入って介護事業へ拡がり、さらに子育て事業へと発展した。しかしながら、指定管理という悪法と言われて仕方のない制度締め付けの中で、都市部の組合員は利用者と地域に向き合いながら、不本意な制度をなんとか突破し解き放とうと、工夫しながら「自主事業」と仕事おこしを試みてきた。自治体主導による指定管理の枠組みに依存した実践を続けていると、いつ梯子を外され失業させられてしまうのかわからない上に、仕事するために必要なワーカーズコープの看板であるビジョンやミッションまでもが、いつの間にか喪失してしまいかねないという危険性を招くことにもなろう。

その危惧を決別してくれたのが、このフォーラムの好結果である。フォーラムに登場した子ども・若者たちの発言を聞きその表情をも見るにつけ、指定管理制度の枠にありながら縛られた形跡もなく、じつにのびやかに自由奔放な姿を示していたではないか。本フォーラムに子ども・若者たちが積極的に参画して、内在する反発力をバネに、躍動してしまう力として見せつけられると、組合員は制度に縛られても子どもと若者は制度に少しも踊らされてはいないことに安堵する。これからは彼ら自身が企画し全面に踊り出て、大人は後衛に追いやられながらも、しっかりと支えていくのが組合員の役割に違いない。

二日目も「稀」な分科会だった。清掃現場やビルメンテナンスで元気に働くワーカーズの若者たちが、福祉や教育関係のフォーラムにおいて自分の生い立ちに堂々と踏み込んで、不遇だった日々の生活世界を顧みて、働くということに熱弁することなど想像できただろうか。

それだけではない。FEC自給圏から「里山資本主義」といった「第一次産業」に入る子どもたちの実践や運動が子どもたちの声で語られている。自分たち地域のまちづくり運動として子どもたち自身の発案で駅前を清掃し、商店街活性化に子どもたちが直接参加したという報告までみられる。子どもと若者の問題は、高齢者や障がい者の問題ではないかと積極的にとらえるようとする発言も登場する。かつて子どもと若者の存在こそが未来への期待を背負い、とりわけ若者は社会的支柱の存在であったことをしっかりと捉えている。

たとえ社会的排除の標的にされた子ども・若者たちがいても、大反撃することを忘れないであろう。このフォーラムでは多種多彩な人々が集い、弱者救済とか、世代間交流の場だったという「稀」なるレベルでは到底つきない。きわめて総合的かつ複合的な視点から、他に類例をみないフォーラムを実現しようとしていたのである。ワーカーズコープとは何か深く掘り下げてきた組合員ならば、「稀」の結末はある程度推測できたであろう。つまり「総合的福祉の拠点づくり」の事業所を目指している組合員は、子どもの施設で働く組合員だから子ども関連の集会しか関心がないので参加しないとか、高齢者施設担当だから高齢者問題だとか、放課後等デイサービスであればとか、特定分野のみに傾斜してしまうような見方からは脱皮する。現場対応において対象性や表れ方は様々な違いはあるにしても、事柄の土台にある本質は同じところにあって、子ども

向けとか高齢者向けとかに違いなどなく、あるのは制度とか年齢、身体の大きさ、色合い、好み等々いった違いに過ぎないのだ。

縦割り学問分野、縦割り行政に色分けされる集会スタイルの方が、ワーカーズコープの立場からすれば奇異となる。人間の個別的な動態行動を生活全体からとらえようとせず、ある一定方向から細分化して輪切りしたまま静止分析するという、しかも専門性優位で一般化して結論を導いてしまうことは、問題解決の決め手に多様な方法が認められると考える現場感覚からすると、始末の悪い縦割り特定化、専門分別化の決めつけになりかねない。個別に分断する思考と指向性の分析から逃れられなかった人にとっては、蓄積の前例がない12分科会構成要素は不整合で混濁した分科会にしか見えなかったかもしれない。消化不良のまま帰宅した方もいたであろう。個別分科会設定の半分以上は斬新かつ最先端タイトルだから余計そう見えるかもしれない。一人で12分科会のすべては同時進行しているので出られない。けれども12分科会の報告をすべて読み切ってはじめて１分科会に参加したとの面持ちになるのは、ワーカーズコープは子ども・若者問題を更に深化させなくてはならないが、そこに尽くされない広範囲な分野と課題を別にもちつづけているからでもある。

第２回の東京家政大学で開催されたとき、まだ若者分科会さえなかった当時に永戸連合会理事長は、なぜ子育てフォーラムに高齢者分科会がないのか、まったくもって不可思議で疑問だと噛みついた。学問分野研究や縦割り行政のドグマにはまってしまえば、子どもフォーラムになぜ高齢者の分科会なんかあるのかが不思議となる。若者分科会は前回のフォーラムから子どもと繋げて成立したが、高齢者事業においては子どもに係る実践や実態が議論されはじめているのに、今もって高齢者分科会の名称は実現していない。子どもの問題は、子どもだけに限定しなければならないかのような常識の非常識がまだまだまかりとおっている。永戸氏に限らず、生活のあらゆる角度から子どもをとらえなければという習性は組合員ならば抜けないであろう。ワーカーズコープには現在様々な課題別集会があって、子ども･若者のフォーラムはそのひとつに過ぎない。縦割りのままフォーラムを続けたら、組織も組合員も縦割りのとばっちりを受けてしまうのである。

永戸対談で登場した喜多方市で農業科を提唱した中村桂子さん、なんとなく今年も足が向いたから呼ばれていないのに来客したという教育学者の太田堯先生は、命という根本の次元から話し語ろうとする。中村さんは専門だから当然ながら、「いのちの輝き」とか「いのちの息吹」を語る太田先生は教育学や福祉学以前の38億年前に発生したバクテリアの問題からその脈絡をとらえようとしてきた。大風呂敷ではなく、労働や遊びとの関係と起源、それと人類の支えあい、分かちあい、学び合いの関係と根源を真剣に考えるなら近代とか中世ではなく、20万年前から1000万年、１億年くらい前の太古の昔から進化する遺伝子スケールで議論しなければ、事柄の本質などつかめないということなのだろう。

関連していえば、このフォーラムにはワーカーズコープの大きな見えざる手が働いたことであろう。子ども・若者の労働観と政治観を戦後日本の教育学や福祉学ばかりか、社会もまた真正面に据えることなく忌避してきた。社会と交わり向き合うようになった彼らは、直球で語りはじめたといえる。戦後のある時期から勉強ばかりがなによりも最優先されて、労働や仕事は卑しくラクするものなのか免除までされ、文化・芸術は癒しで政治のことは成人になってからだと遠ざけ

られた。労働や政治の世界を見つめることは未成年者ならば禁止や回避の事柄なのだろうか、労働と遊びの関係は別物であっていいのだろうか、子ども・若者の政治への参加と関心は大人ならばOKで、子ども・若者はイデオロギッシュで政治性を帯びていく行動は認められないのか。子どもと若者は成人に達してからはじめれば、しっかりとした労働観や政治観を身につけられるものなのだろうか。日本は、子どものときから市民意識と市民形成能力に必要な政治的公共性をどこで保障してきたのか、タブー視して近づかせなかったのではないか。公民性や市民性の教育が道徳教育だとしたら、あまりに稚拙である。自然体験、社会体験、労働体験、政治体験など様々な環境体験がいま必要となっているのではないか。わざわざヴェンガーの体験学習論を引き出すまでもなく、かつての人間社会はそのようなものではなかったのか。

全体会と分科会において、威風堂々と大人に交じって自信に満ちた丁寧かつ説得力のある子ども・若者たちの姿が、大人たちに大きな感動と衝撃を与えた。ある子ども・若者の語りは、打ちのめされ困難に塞がれ打ちひしがれそうになりながら、なんとか突破しようともがき苦しんでいる。子どもや若者の語りは具体的で一般化させず、大人とは違ってコトバに詰まると表情や仕草から、その意図するところを伺い知ることもできる。子どもだからではなく、ストーリーとドラマツルギーを秘めた話は透きとおっている。ミクロな話でも物語性は十分にある生活世界で、当事者主体の機能が発揮されてくればくるほど、仲間や地域とのネットワークは蜘蛛の巣城に広がって、昔コトバでいえば「結と講」集団のように繋がっていく。社会と個人の多様な関係性がヒトの成長に大きく係っていたことが理解される。石巻の東日本大震災圏域創生NPOセンターの復興事例などは、孤立や分断の継続ではなく社会的人間関係のあるべき姿を浮上させた典型事例かもしれない。教育力というより人間の生命力に内在する原始的ともいえる自然体の活動さえあれば、高度な専門性は特別に必要とせず、ふつうの人々のふつうの付き合いが「ヒトを人に成す」ということを教えくれていたようにおもう。

＊本特集の写真および資料掲載にあたっては、フォーラム実行委員会および労協新聞の多大な便宜があった。あらためて謝辞を述べておきたい。

協同総合研究所　上平 泰博